

橋村りかと声なき声をつむぐ会（後援会） ニュース

第31号 2026年10月発行



恵楓園の「告発」と健軍駐屯地の「危機」 ——かき消される声を、今こそ政治の真ん中へ

党派や立場を超え、「一人ひとりの痛みに寄り添う政治を創りたい」と集う『つむぐ会』の皆さまへ。

橋村りかさんは9月30日（菊陽町）と10月1日（益城町）、マイクを握り街頭に立ちました。直前には社民党・ラサール石井幹事長とともに国立ハンセン病療養所「菊池恵楓園」を訪問し、入所者の皆さんの声や歴史の遺品に向き合ってきたばかりです。

「声を上げることすら諦めさせられてきた人々の心の叫びを、どうやって国政に届けるか」。二日間の演説で橋村さんが語った、現場からの切実な言葉をお届けします。

■ 恵楓園で出会った「言葉」—— 弱い者が弱い者を叩く社会を どう止めるか

菊池恵楓園の歴史資料館。そこに展示されていたのは、入所者の方々に向けられた数々の攻撃的な手紙でした。「仕事もせず人権を語るな」——目を覆いたくなるような差別的な言葉の展示を前に、橋村さんは案内してくれた若い学芸員の方と語り合いました。

「なぜ、こんな激しい言葉を書き連ねなければならなかったのでしょうか」

学芸員の方の言葉が深く心に刺さりました。「手紙を書いた人自身も、この社会から大切にされていないという苦しみを抱えていたのではないのでしょうか。その生きづらさの矛先が、より弱い立場の人に向かってしまった……」

「頑張れないのは自己責任だ」「苦しいと言わないのは困っていないからだ」と突き放す冷たい社会。自分自身が大切にされていないと感じる不寛容な空気が、さらに弱い人を叩く連鎖を生んでいます。

被災現場でも同じです。「もっと大変な人がいるから」と声を上げる余裕すら奪われている人たちがいます。橋村さんは訴えます。「歪んだ社会構造を変え、『あなたが生きていること自体が社会の希望だ』と言い合える政治を取り戻さなければならぬ」と。



声を上げることすら
諦めさせられてきた
人々の心の叫びを、
どうやって国政に届
けるか



■ 過去の負の歴史に

向き合う「覚悟」が、信頼の基盤になる

政治は権力や強さを誇示するためのものではありません。

現政権が「その時代に生まれていないから昔の戦争責任は関係ない」と背を向ける態度に対し、橋村さんは「過去の過ちから逃げない覚悟」を問いかけます。

社民党の前身である社会党にも、かつて優生保護法に賛成したという重い負の歴史があります。橋村さんは隠すことなくこう語ります。

「時代背景があったとはいえ、なぜあの時賛成してしまったのか。自分の時代ではないと目を背けるのではなく、過去の過ちを真摯に反省し、二度と繰り返さない決意すること。それこそが、声なき声に応える政治の責任です」

自分の責任に向き合ってこそ、差別や人権侵害を二度と許さない真の平和が築かれます。

■ 健軍駐屯地に迫る戦争の足音—— 日々の暮らしを

「有事の標的」にさせない

10月中旬から行われる日米合同軍事演習。ここ熊本の健軍駐屯地では、長距離ミサイルの発射手順確認や、他演習場への搬入訓練が計画されています。

政府は「移動式だから安全だ」と言い逃れをしますが、演習が行われるということは、有事の際にここが攻撃目標になり得るということです。

戦争が始まれば、真っ先に犠牲になるのは避難が困難な高齢者や障害のある方、子どもたちです。戦争が起きてからでは「反対」の声すら奪われます。だからこそ橋村さんは訴えます。

「平和であってこそ、一人ひとりの尊厳や命が守られる。戦争のない平和な社会でしか、あなたがあなたらしく生きる道はありません。だから今、声を上げ続けます」

■ 【対話を通じて】

「声をつむぎ、国政へ届けるために」

「10年後、自分の子どもから『なぜあの時もっと反対してくれなかったの？』と言わせたくない」——一人の親としても切実な想いを語る橋村さん。

政治から置き去りにされ、かき消されそうになっている小さな声を掬い出し、誰もが息をしやすい社会を創る。そのために「橋村りかと声なき声をつむぐ会」は、これからも党派の垣根を越えて一人ひとりの声に耳を傾け、ともに歩んでいきます。

平和であってこそ、
一人ひとりの尊厳や命が守られる。
戦争のない
平和な社会でしか、
あなたが
あなたらしく
生きる道はありません。

